

## 越境する結婚移住者の教育観に関する基礎調査

### 国際結婚した在外日本人父親の言説分析

# Educational beliefs of marriage migrants: Analyzing discourses of Japanese husbands intermarried with Chinese, Filipina, Korean, and Thai wives

渡辺 幸倫

宣 元 錫<sup>1)</sup>

藤田ラウンド 幸世<sup>2)</sup>

## はじめに

本稿は、科学研究費基盤（C）の助成を受けて実施した、2016-2018年度『越境する結婚移住者の教育観に関する基礎調査：国際結婚した在外日本人父親の言説分析（研究課題番号：16K04630）』の調査結果をまとめた研究ノートである。本研究は、先行して行った科学研究費基盤（C）2013-2015年度『多文化家庭の子育て戦略の課題 - 日韓中の国際カップルへのインタビュー調査（研究課題番号：25381142）』から直接の着想を得た。同研究では、日本、韓国、中国に居住する国際結婚家庭の子育て戦略の特徴を明らかにすることを目的に、日本在住の日中・日韓カップル、韓国在住の韓日・韓中カップル、中国在住の中日・中韓カップルにインタビューし対象三国の課題を立体的に記述した。その結果、各国で非「標準」である国際結婚をしたカップルがそれぞれの環境で大胆かつ細心な教育戦略を練り、実行している様相を描くことができた（渡辺 2014, 渡辺・藤田ラウンド・宣 2016, 渡辺ほか 2016 など）。しかし、その過程で、「国際結婚」を経て「海外に住む日本人」、及び、「父親の教育観」に関する研究の必要性が明らかになった。

日本における「国際結婚」をテーマにした既存の研究は妻・母親側の視点、つまり女性の目線に立ち、「弱者」である女性を支援しようとする文脈で行われている傾向が強い。研究の視点としては、日本国内居住者を対象としたものが多い（武田 2011 など）。また日本人配偶者を含む国際結婚家庭は外国人同士の家庭よりも日本社会や日本的資源へのアクセスが比較的容易と考えられる傾向もある。一方、海外に居住する国際結婚した日本人の研究も妻側に立ったものが目立つ（竹下 2001、花井 2014）。全体的に女性の研究者が多いためか、直面する問題の緊急性や深刻性と対比されているためか、日本人男性は経済的、権力的な優位性

---

1) 大阪経済法科大学研究員

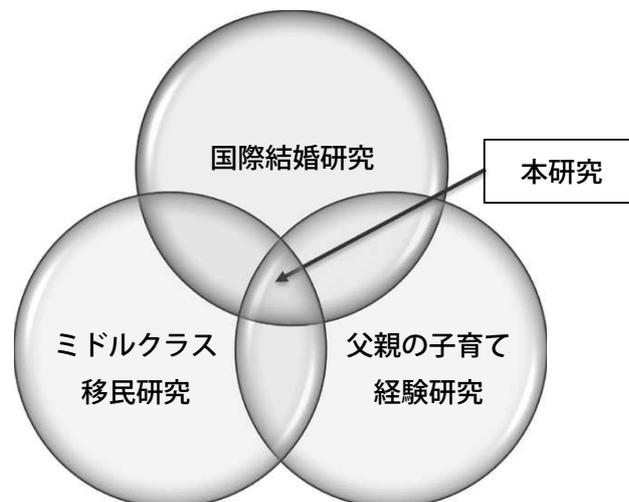
2) 国際基督教大学客員准教授

などの文脈で語られることが多く、研究の対象としてやや見えにくい状況に置かれているようだ。国際結婚家庭の教育を対象にした研究も一定程度なされてきたが同様のジェンダー化された傾向を示している<sup>3)</sup>。

また、「海外に住む日本人」全般を対象とした研究は、「新興国から先進国へ」という経済移民と対比する形で、高熟練移民やライフスタイル移民を含む「ミドルクラス移民」をキーワードに進んでいる（松谷 2014、ニ ヌンガー 2014 など）。しかし、これまでの研究では移動動機に着目したものや、移住先での生活を分析したものが多く個人の選択としての移動が主な対象であり、本研究が念頭におく「国際結婚から子育て」という時間的広がりを持った選択を家族で（あるいは家族の一員として）決定するという構造を伴う過程（プロセス）は対象となっていない。

一方、日本国内での「父親の教育観」を対象とした研究はまだ端緒についたばかりで、父親の育児経験やそれを取り巻く言説の分析が進みつつある（石井 2013、多賀 2010、高橋 2016 など）。そこでは父親の育児参加を求める社会的な変化や、その変化に対する父親たちの対応の在り方などが議論されているが、文脈として国際結婚家庭が対象となることは極めて限定的であり、海外在住者に至ってはほぼ対象にすらされてこなかった。

図 1 本研究の位置づけ概念図



つまり、既存の「子育てする親」の教育観に関わる研究は母親を対象にしたものが大半で、父親に関するもの、特に国際結婚を前提とするものはほとんどなされてこなかった。そのた

3) 例えば、2018年6月の段階でNII学術情報ナビゲータの論文検索(フリーワード)で、「国際結婚」「多文化家庭」「多文化家族」のいずれかと「教育」「子育て」のいずれかを含む論文123件を抽出し、主な研究対象についての内容分析を行ったところ、母親(48件)、子ども(29件)、両親(22件)、父親(0件)、その他(政策、教育機関など)(24件)であった。なお「国際結婚」「多文化家庭」「多文化家族」と「母親」「父親」の組み合わせの論文数を調べたところ、母親20件であるのに対し父親はわずか3件であった(渡辺(2018)日本国際理解教育学会28回大会)。

め海外在住の国際結婚家庭における父親の子育て経験は、国際結婚家庭の研究としても、父親の子育て経験の研究としても、ミドルクラス移民の研究としても、探求が求められている分野とよい。

そこで本研究では、2013-2015年度に行った研究（渡辺ほか 2016）との連続性を念頭に、ナラティブ理論に基づく枠組みの下で国際結婚を経て海外で子育てをする日本人父親の子育て・教育を軸にしたライフストーリーを収集し分析することで、国際結婚した日本人父親の子育て言説という大枠の下、海外で子育てをする父親たちの教育観について考察する事を目的とした。

対象国は、2013-2015年度までの研究で扱った中国、韓国に、フィリピン、タイを加えた。これによって日本人男性の国際結婚相手国の上位4か国すべてが対象となる。これまでインタビューした父親たちからも「海外で子育てする父親に関する情報が少ない」という声が多く、同時期に行っていた他の研究<sup>4)</sup>の過程で機会を得たタイやフィリピン在住者へのインフォーマルなインタビューにおいても、国際結婚した日本人父親に関する教育言説の不在や情報不足を不安視する声が強かった。そのため、これらの声にこたえることも本研究の目的の一つとした。したがって、本研究では研究の初期段階からインタビューで得られた情報をアクセスしやすい形に編集したうえで、国内外に発信し、現実に海外で子育てしている父親たちに「役立つ」形で還元する方法の模索にも重点を置いた。

以上を踏まえ、本稿では、これまで行ってきた調査の概要と結果、および研究成果還元のための取り組みについて述べる。

## 1. 在外公館に届けられている国際結婚の傾向

日本人の国際結婚数を論じる際には、日本国内で届けられたものが多数のためか、在外公館に届けられた婚姻が議論の対象になることは少ない。しかし、厚生労働省の人口動態調査（1995-2017）によると、2017年に海外で届けられた日本人（主に海外在住者）の婚姻の8割以上が国際結婚である。国内届出分の国際結婚数 21,457 件に対して国外分は 9,339 件にも上るため、日本人の国際結婚の傾向を論じる際には、国内外双方の届け出分を考慮に入れる必要がある。

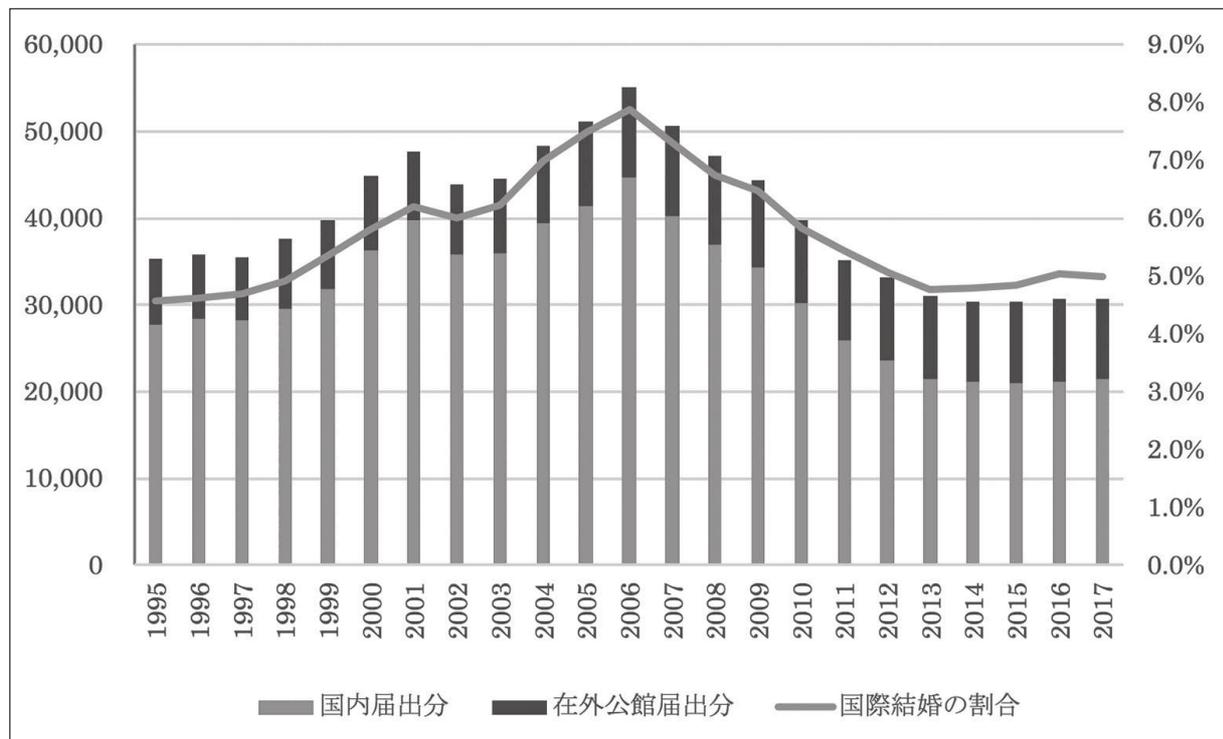
国内外の届け出分を合わせた日本人の婚姻総数に対する「夫妻の一方が外国籍」の割合は2006年にピークを迎えている。その後は緩やかに下降し2013年から2014年を底にやや上昇している（表1）。日本人の婚姻総数は約77万件から2017年の約62万件へと急減しているが、国際結婚の数はあまり連動しているように見えない。むしろ国外で届けられた婚姻

---

4) JSPS 科研費（16K13272）「学習対象としての周縁的英語論の試み：タイ人訪日旅行経験に基づくタイ英語の教材化」（2016-2018年度）代表：宮本節子、JSPS 科研費（15K02767）「フィリピン英語留学における教室内談話の分析：共通語としての英語使用の観点から」（2015-2017年度）代表：羽井佐昭彦、JSPS 科研費（15K13052）「『買物弱者』としての在外子育て家庭の研究：国内流通課題への適応可能性」（2015-2018年度）代表：久保康彦

の件数も国内同様減少しているがその傾向は緩やかなため、在外公館で届けられる結婚の割合は、2006年 18.9%から2017年 30.3%となり、在外での国際結婚の存在感が高まっている。

表1 届出先別国際結婚件数と総婚姻数に占める国際結婚の割合（1995-2017）

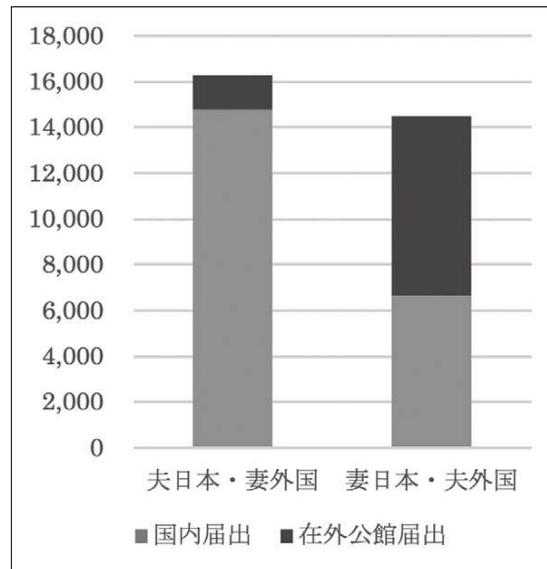


厚生労働省人口動態調査（1995-2017）から筆者作成。以下同じ。

また男女差を見ると、全体としてはそれほど大きな差はないものの、結婚後の居住地を推知させる<sup>5)</sup> 婚姻の届け出国は男女で大きな違いがあり、夫日本人・妻外国人の場合には日本での届け出が多く、逆の場合には在外公館が過半数となっている（表2）。いずれにしても相手国によって多少の差はあるものの日本人のかかわる国際結婚につながる移動は、概して女性の側であることが多い。

5) 在外公館への届け出分は必ずしも配偶者側の国の公館とは限らず、第三国の場合も含まれる

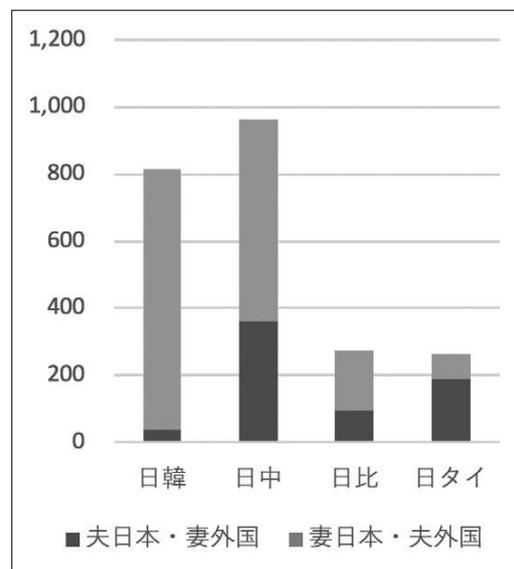
表2 届け出先と婚姻数の男女比 (2017)



婚姻相手の国籍は上位から中国 (6,896 件)、韓国・朝鮮 (4,343 件)、フィリピン (4,121 件)、米国 (3,488 件)、タイ (1,276 件)、ブラジル (988 件)、英国 (664 件)、ペルー (244 件) となっている。しかし、国籍と男女の内訳には大きな差がある。対韓国・朝鮮及び南米ではほぼ均衡しているものの、対中国、フィリピン、タイでは夫日本人・妻外国人が圧倒的に多く、対米英では逆転している。

本研究の対象4か国で結婚を届けた事例をみても、概して女性が移動していると思われる場合が多い(表3)。ただし、タイは例外で男性が移動している事例が過半数を占めている点は注目すべきだろう。この点については、後述のように調査の過程で興味深い話を多数聞くことができた。

表3 対象4か国との組み合わせで在外公館に届けた事例の男女比内訳 (2017)



(渡辺幸倫)

## 2. 調査について

科学研究費申請時の計画では、4カ国すべてを改めて調査する予定であったが、充足率の関係もあり2013-2015年度の研究で扱った中国、韓国については、既にインタビューした方々の継続的な変化を念頭にしたフォローアップインタビューを中心とする事で出張費用等の節減を図った。一方、今回の研究（2016-2018年度）で新たに加えた調査地（タイ、フィリピン）では、新規の調査ネットワークの構築も必要であったため、集中的な調査を行うこととした。結果、タイ5回、フィリピン5回、韓国4回、中国（うち1回は研究協力者招聘）2回、他にも日本国内で一時帰国時や本帰国者などへのインタビューも行った。具体的には下記の通り。

表4 調査の一覧

時期	目的	場所	担当
2016年6月	中国の研究協力者（裘曉蘭：上海社会科学院）招聘	東京	渡辺
2016年11月	韓国継承日本語教育関係者らへのヒアリング等	ソウル近郊	藤田ラウンド
2017年2月	現地での研究趣旨説明及びネットワーキング、日本語サークルの参与観察、日タイ家庭インタビュー等	バンコク	渡辺
2017年6月	日フィリピン家庭のインタビュー、フィリピンにおける子育て環境のフィールド調査等	マニラ	宣
2017年7月	日タイ家庭のインタビュー、バンコクの子育て環境のフィールド調査等	バンコク	渡辺
2017年12月 -2018年1月	日本語サークルでの参与観察、日タイ子育て家庭についてのインタビュー等	バンコク	渡辺
2018年1月	日タイ家庭のインタビュー、タイにおける子育て環境のフィールド調査等	バンコク	宣
2018年3月	日韓家庭のインタビュー、韓国における多文化家族支援状況の調査等	ソウルおよび光州市	渡辺
2018年7月	日本語サークルの参与観察、質問紙調査、言語教育に関する親との懇談会、短期フィールド調査等	バンコク	藤田ラウンド
2018年7月	日フィリピン家庭のインタビュー、フィリピンにおける子育て環境のフィールド調査等	マニラ、セブ	渡辺
2018年7月	日フィリピン家庭のインタビュー、フィリピンにおける子育て環境のフィールド調査等	マニラ、セブ	宣
2018年10月	日フィリピン家庭についてのインタビュー、マニラにおける子育て環境のフィールド調査等	マニラ	渡辺
2018年12月	日本語サークルの参与観察と親へインタビュー調査等	ソウル近郊	藤田ラウンド
2018年12月	韓フィリピン家庭のインタビュー、フィリピンにおける子育て環境のフィールド調査等	マニラ、セブ	宣
2019年3月	日中家庭のインタビュー、研究成果還元のためのセミナー等	上海	渡辺
2019年3月 (予定)	日韓家庭のインタビュー調査を中心とした研究成果還元のための報告会等	ソウル	藤田ラウンド

### 3. 調査結果の考察

以上の調査、現時点までの学会発表、公表論文、共同研究者間の議論を踏まえて、現段階のまとめとして論点を提示する。具体的には、①タイとフィリピンでのインタビューから析出された言語教育にのせられる将来の経済的な利益を見越した「投資」と親子の連続性を意図した「アイデンティティ」という側面への語りを中心にした議論（宣）と、②韓国とタイにおける自主的な日本語サークル運営をする親へのインタビュー分析から、親自身の自己実現やジェンダーといった観点からの議論を整理したい（藤田ラウンド）。

#### 3-1 東南アジア居住国際結婚家庭の子育ての状況：タイとフィリピンの事例

##### 3-1-1 調査概要

国際結婚家庭の子育てと関連して、今回の調査はタイとフィリピンに居住している日本人と韓国人を対象に、子どもの言語教育と学校選択を中心に調査を行った。今回の研究は前回の韓国と中国に続き、フィールドを東南アジアに広げて、国際結婚家庭の子育て戦略の実情を調査する狙いがあった。具体的には、下記のような調査を行った。

タイではタイ人男性と結婚してバンコクで子育てをしている日本人女性二人と、ミャンマー人女性と結婚して現在バンコクに在住している日本人男性一人の計3人にインタビューを行った。前者の二人の子どもは日本人学校とタイのインターナショナルスクールと進学の道が異なる。後者の日本人父親の家族は母親がミャンマー人で、しばらくヤンゴンで生活していたが、父親の仕事関係でバンコクに移り住んでいた。

フィリピンでは、日本人とフィリピン人、韓国人とフィリピン人の国際結婚家庭の比較を念頭に調査を行った。日本人とフィリピン人の国際結婚家族については、マニラでフィリピン人女性と結婚して子育てしている日本人父親二人、セブでフィリピン人男性と結婚して子育てしている日本人女性一人、結婚はしてないが同居中で妊娠中の日本人女性一人、そしてフィリピン人女性と結婚して子育てしている日本人男性の一人にインタビューを行った。学齢期の子供を育てているセブの日本人女性の家庭は子供を現地の私立学校に行かせていた。

韓国人とフィリピン人の国際結婚家族については、フィリピン人女性と結婚して子育てしている7人の韓国人男性を、マニラで3人、セブで4人インタビューした。学齢期の子供を持つ家庭では、一つのケースを除いて、全て英語で教育を行っている私立学校に子供を行かせていた。例外の一つのケースは現在居住している地域に私立学校がないためであった。

##### 3-1-2 考察

###### ① 英語優先の学校選択

タイ、フィリピンともに母語以上に英語の地位が高い点をまず指摘したい。「母語以上」と結論付けるのは性急かもしれないが、少なくともインタビューの中でうかがえたことは、日常生活は現地のローカル言語が中心であるが、高等教育においては英語の比重が高く、そのために初等、中等教育においても英語教育の意欲が高いということである。この点は英語が

公用語として日常的に使われるフィリピンでとくに顕著であった。しかしタイでも経済的に余力がある家庭であれば、国際結婚家庭でなくとも子供を英語教育の比重が高い私立学校に送るのが、これまでのインタビューの中では一般的であった。こうした状況は現地に居住している日本人親の学校選択にも影響を及ぼし、英語中心の私立学校を選択するケースが多かった。また私立学校の選択には英語教育以外にも教育の質の問題も絡んでいた。すなわちローカルの公立学校が私立学校に比べて教育の質が担保できないという認識が社会的通念として一般的であり、英語教育の充実と相まって多くの国際結婚家庭で私立学校を選択する要因になっている。

一方、フィリピンでの英語教育はタイとはまた別の側面を持っている。フィリピンは多言語社会であり、首都マニラが位置するルソン島で使われるタガログ語が公用語として全国の初等中等教育でも用いられているが、中部のビサヤと南部のミンダナオ島地域はビサヤ語、またセブを中心とする地域にはセブアノ語などが日常語として使用されている。インタビューを行ったセブ社会では、多くの人々がタガログ語は学校で習っているのだから理解はできるが、日常的にはセブアノ語を使っている。もしセブで進学や就職をするならばタガログ語より英語が有効であり、また海外出稼ぎのためにも英語が有効であるのは言うまでもない。このような状況は国際結婚家庭の言語教育にもそのまま当てはまり、日本人や韓国人の親は現地語の習得より英語を優先する強い動機が生まれ、子どもの言語習得に対しても現地語は自然に身につく程度で十分とされ、もっぱら関心は英語と親の母語（日本語や韓国語）の教育に注がれている。

## ② 移住した親の言語教育

次にタイ、フィリピンともに日本語のプレゼンスが高い点を指摘できる。とくにタイは日系企業が多く進出していて、駐在員のみならず日本人現地採用の雇用需要と、これら日本人を顧客とするサービス市場の規模も大きい。高い日本のプレゼンスは日本語の需要を高め、労働市場の中で日本語が有効な人的資源として機能する環境を作り出している。インタビューを行った国際結婚家庭は日本語教育の意欲が高く、学校選択においても私立学校と並んで日本人学校も選択肢となっていた。日本語教育については日本人親だけではなくタイ人親も日本語が将来的に有効であるはず（言い換えれば、就職に有利、高い給料をもらえるなど）だと認識していて、日本語教育に積極的な姿勢がうかがえた。この点はフィリピンも同様に日本語ができれば就職に有利という認識は共通していた。ところが、こうした認識が日本語教育の実践に直結するわけではない。日本人学校に送るケースを別とすれば、日本語教育は基本的に日本人親の役割となる。日本人親が中心となって作った子育てサークルや日本人学校の土曜学級などが代案になろうが、英語とローカル言語の狭間で日本語をいかに教えるかという悩みは両国ともに共通している。

ちなみに、今回はフィリピンで韓国人とフィリピン人の国際結婚家庭もインタビューを行ったが、上記の状況は共通している。すべてのケースで英語重視の私立学校に送っていた

か、もしくはその予定だとしていた。また韓国語が将来的に有効であるという認識も共通していた。

### ③ アイデンティティと言語

日本人や韓国人親が母語を教える動機はさまざまであるが、親との紐帯を重視し親の母語を学んでほしいという動機と経済的な観点から親の母語を有効な外国語ととらえる人々がいた。この両グループは排他的というより、双方を合わせ持ったうえでどれをより意識するかの違いといったほうが適切だろう。すなわち親と深い感情をも共有できる言語として親の母語を学んでほしいと思っている人も、それが経済的資源になることを否定しない。また親との紐帯より親の母語が現地で就職などに有利なので学んで損はないと思っている人もそれが親とのコミュニケーションに役立つと思っている。アイデンティティを重視する人の中には躊躇なく「私が〇〇人だから〇〇語を学ぶのは当たり前」という人もいれば、反対に「日本語ができるタイ人」、「韓国語ができるフィリピン人」として育てるというように親の母語を明確に外国語として位置づける人もおり、言語とアイデンティティの組み合わせのスペクトラムの幅が広く多様である。

一つ付け加えるのであれば、タイとフィリピンで英語優先の言語環境で育てられている子どもたちであるが、彼・彼女らは居住国と親の出身国両方に紐帯を感じていて、両親の言語はその枠組みでみられているのに対して、英語は脱アイデンティティ言語と考えられている点である。中には移住した親の言語があまりできない子どももいるが、インタビューした親は子どもたちが親の出身国に対して一定の紐帯を感じていると認識していた。タイとフィリピンともに国際結婚に対する否定的な意識は少なく、その家庭の子どもに対する偏見やいじめなどの問題もあまりないのもその原因の一つではないかと親たちは言っているが、この点についてはさらなる調査と考察が必要である。

### ④ 東アジアと東南アジアの比較

今回の調査は必ずしも東アジアと東南アジアを比較する目的があったわけではないが、調査を進めるうちに両地域の言語と教育環境の違いが現地の日本人や韓国人の教育観に影響を及ぼすのではないかという点に気付かされた。韓国や中国では教育の中で英語が重視されると言っても、教育は基本的に現地語を中心に行われ、英語はあくまでも外国語教育として位置づけられるのと対比的に、今回調査を行ったタイとフィリピンでは英語が教育の中心に据えられていた。タイとフィリピンにはこのような実情をあらわすように数多い多種多様の私立学校があり、国際結婚家庭は英語重視の私立学校を選択しやすい環境にあると言える。

(宣元錫)

## 3-2 親が運営する日本語サークルでのバイリンガル教育：韓国とタイの事例

### 3-2-1 調査概要

ここでは、韓国とタイでは親が運営する「日本語サークル」のバイリンガル教育に関する調査を報告する。親が運営する日本語サークルという共通項と「母親たち」と「父親」が立ち上げた点、また、韓国とタイという国の文脈を比較することで在外国際結婚家族のバイリンガル教育を考察することにした。

韓国では、2013年にソウル近郊イルサン地区の日韓国際結婚の日本人母親にインタビューを行った際、彼女をはじめとするイルサン地域の日本人母親たちが日本語サークル、「ひまわりキッズ日本語クラブ（以下、ひまわりキッズと略す）」を自主的に立ち上げたことを知った。

翌年の2014年、2015年、2018年の3回、ひまわりキッズの日本語授業の参与観察と日本人母親にインタビューを行い、その返礼として2014年と2015年の訪問時にひまわりキッズの日本人母親を対象に「バイリンガルの言語発達」のミニ講義を行った。日本語サークルの中心的役割を果たしている母親たちとは、調査時のインタビューに加えて、それ以後も電子メールのやり取り、SNSのフェイスブックで継続して交流した。2013年当初、日韓国際結婚の日本人母親5人で構想したこのサークルは、現在では子どもたちの年齢に配慮した3クラス体制になり、活動場所も地域にあるクッキングスクール兼カフェに定着し、2018年12月現在では3歳から10歳までの22人の子ども達が月に二回の土曜日に日本語を学ぶ場となっている。

ひまわりキッズの韓国での文脈を外側から理解するために、2016年にはソウル近郊ブندان地区で日本語教室を運営するAさんと韓国継承日本語教育の研究会関係者である大学教員のBさんの二人に、韓国における近年の日本語教育の動向についてヒアリングを行った。ここでわかったことは、親による日本語教室やサークルは増加する一面、子どもの成長とともに解散する例もあり、多様な試みは時々に見られるものの、正式な日本人学校のような学校ではない形態の教育においてはその「場」を維持させることが難しいということがわかった。

次に、タイの日本語サークルであるが、これは共同研究者のバンコクでの日本人父親へのインタビューで、その方が「バンコク日本語補習サークル（以下、バンコク日本語サークル）」を主宰すると聞き、筆者も2018年7月に訪問した。事前に質問紙調査をバンコク日本語サークルの親に依頼し、現地では日本語授業の参与観察を行い、授業後にバイリンガル児の言語教育というテーマで親たちと懇談会を持った。無償の日本語サークルを主宰する父親のCさんは、自分の子どもとその友達に日本語と日本について教えたいという気持ちがあり、またそれを楽しんでいることもわかった。授業後の懇談会ではこの教室に子どもを通わせている5家族（内訳は父親4人・母親3人、国籍は日本人3人・タイ人4人）、7人の親たちと懇談会を持ったが、ここでは日常生活での言語の教育に関わる質問が多く出て、各家庭が手探りで子どもの教育を考えていることもわかった。筆者にとってタイの訪問は初めてであったことから、バンコク日本語サークル、家族と子どもを取り巻く背景への理解を深めるために、日本人集住地のスクインビットの道々、日本語で買い物ができるスーパー、日本語の看板の

ある店などで情報を収集し、日本人同士のネットワークの場である「日本人サロン」にも出向き、短期間のフィールド調査も行った。

### 3-2-2 考察

#### ① 在外国際結婚家族のバイリンガル教育

国際結婚家族の子どもの教育戦略を考える場合、「国」を越えての結婚であることから、親たちの母語や母文化が異なることが考えられ、複数の言語と文化が日常生活で交叉することになる点には注意が必要だ。ここでは複数の言語や文化が関わるのだが、国際結婚家族がいずれの親の出身国に居住するにせよ、居住地の言語と文化はどちらかの親の第一言語と母文化となり、もう一方の親にとってそうではないことになる。その状況の中で子育てを行う場合は、1) 両親同士は何語で話し合うのか、2) 子どもに向かってそれぞれの親は何語を話すのか、3) 家の中の言語を社会言語（現地で使われている言語）ではない少数言語として話すのかなどがポイントとなる。こうした親の家庭内での言語使用をどのようにするのかによって、親は意識する、しないに関わらず、広い意味でのバイリンガル教育を行うことになる。

バイリンガル教育というと、学校の選択という発想につながりやすいが、日常生活の中で親の言語を聞いて育つ子どもは、家の中での言語と家の外での言語が異なれば、ここからすでに二言語に接触していることになる。このように国際結婚家族の中ではバイリンガル教育は、子どもが生まれたときから、その機会が生じることになる。しかし、国際結婚だからといって子どもは「自然に」「自動的に」バイリンガルになるわけではない（藤田ラウンド、2013）。

一口にバイリンガルといっても、二言語の組み合わせ、言語を使用する「(家庭や学校などの)場」、教育の目的や方法、また子どもが二言語に接触する時期などにより、一人ひとりその状況は異なる。在外国際結婚家族の研究にひきつけて考えてみると、渡辺・藤田ラウンド・宣（2016）と渡辺ほか（2016）で報告したように、親自身の言語習得経験や学歴、また、親の社会階層や子どもに対する期待など、言語や子ども本人の属性だけではなく、国際結婚家族を取り巻くさまざまな要因が子どもの言語習得に関わる。さらにいえば、この言語習得を取り巻く環境は、言語話者としてのアイデンティティにもつながるものである（Fujita-Round, 2019）。在外国際結婚家族の場合は、日本の外で居住していることと、居住地の学校教育に就学する場合は、パスポートを持っているという国籍のレベルではなく、アイデンティティの形成という点で、言語を話せることが子ども個人にとって大きな意味を持つのかもしれない（Maher, 2017）。

#### ② 親が実施する手作りのバイリンガル教育

筆者は、研究者であり、また、国際結婚家族で子育てをした先輩もあるので、初めから調査を通してひまわりキッズの日本人母親たちと有機的に関われないかと考えた。そのため、この調査はアクション・リサーチのように、サークルのバイリンガル教育の「アドバイザー」

的な立場でゆるやかな関係性を持ちながら継続的に関わってきた。日本語サークルの初期の日本人母親たちのインタビュー（渡辺他, 2016a, 2016b）から、日本語母語話者ではない韓国人夫たちは頭では理解し、夫婦間で支えあうことはできても、母親たちは1) 韓国在住の「外国人」という立場にある日本人母親たちの不安定さ、2) 外国での初めての子育てであるというだけではなく、3) 国際結婚家族特有の「子どもの言語」の問題、その方法や選択に迷いや不安を抱えていた。ここは筆者の経験からも共有でき、それが継続的に関わることにつながった。特に、子どもの小学校の入学は、学校選択の決断をする節目であり、国際結婚家族にとっては言語選択に関わる一つの山となる。逆にいうと、在外国際結婚家族にとっては、学校を選ぶ前の乳児期・幼児期がむしろ家庭内でできるバイリンガル教育としての日本語教育を実施できるいい機会となる。筆者が出会った日韓国際結婚家族の日本人母親たちの日本語サークルはまさにその一例となるのだが、いつまで続けられるのかを見守りたいと考えた。

そこにおいては、2014年と2015年に日本人母親たちにミニ講義を行い、子バイリンガルを育てる方法ともなる知識を直接やり取りをしながら行ったことは、ひまわりキッズの母親たちと継続的に連絡をしあうことができる関係性を築くことに繋がったと考えられる。専門家と先輩の両面からの気持ちでの支援である。

### ③ 韓国における国際結婚家族のための日本語教育の状況

2016年11月に行った韓国での国際結婚家族の子どもたちの日本語教育に関するヒアリングでわかったことは、1) 基督教会運営の日本語補習校という名前の教室が土曜日に小学校1-4年対象に国語、算数、社会を教える日本語継承語教育を行っていたという事例、2) ソウルを中心として、韓国で日本語教師をしている国際結婚の日本人母親が教える幼児対象の日本語教室が増加傾向にあるということ、3) 子どもの日本語教育に関わる資格があり、オーストラリアを起点として始まった「幼児日本語教師協会」による幼児日本語教師養成コースや韓国では独自に国家予算で行われる900時間の「二重言語教師」の養成が「幼児」に対する日本語教育のための資格として考えられるようになったということである。

また、親による日本語教室はソウルを中心に2016年当時で20団体ほどであると「韓国継承日本語教育研究会」は把握しており、さらにこの研究会は日本語を継承語と位置付ける国際結婚の子どもたちのための日本語教育を行う教室のネットワークづくりを支援するために互いの紹介や教育実践などを発表しあう場を設けているということだった。

### ④ 韓国での日本人母親たちによる日本語サークル：ひまわりキッズ

韓国内に現存する日本語サークルの20団体の一つが、ひまわりキッズである。ひまわりキッズは発足から4年が経ち、1) 初期の頃に運営の中心的役割を担っていた5人の母親たちは2018年12月に2人になり、運営や日本語教育は他の母親たちとの分担が進み、2) 2016年からは2クラス体制、2017年からは3クラス体制と子どもの成長に合わせ、組織も日本語の学習体制も整い、3) 日本語を教える担当者に、韓国の大学で日本語を教えてい

た元教員がボランティアとして加わり、4) 2018年12月には約22人の子どもが通う教室になっていた。子どもや家族の出入りがありながらも継続し、柔軟に変化をしている。ヒアリングの中にもあったように、韓国では20団体があってもすべての団体がひまわりキッズのように継続をしている訳ではない。

親にとって日本語サークルは子どもの一つの習い事と捉えることもでき、月に何度かの土曜日だけのゆるやかな活動であれば時間的拘束も子どもの幼児期にはさほどではないだろう。しかし、就学後はそうではなくなる。現地の小学校を選択する場合は、教授言語の韓国語と学習科目の英語の重要性が日本語を上回り、また、他の韓国語母語話者の子ども達と同様に学校外の習い事や塾通いというレールに乗ることになるのではないだろうか。母親が韓国語が堪能であればなおさら「日本語」の必要度は下がり、家庭内の日本語の優先順位が落ちる可能性もある。今回の参与観察で日本人母親たちとおしゃべりをする中で、日本語を学習言語にするために母親と子どもだけ日本に移住をしたり、韓国にある日本人学校に入れたりするケースもあると聞いた。就学後は、子どもが日本語サークルを続けるかどうかという点だけでなく、母親が学校外の日本語サークルに自分自身の労力と時間をかけたいかどうかという意識にも変化がおきるだろう。

ひまわりキッズが現在まで継続できた理由の考察として、先に挙げた4つの変化にみられるように変化に応じて体制を再編成してきた柔軟性のある運営を可能にした母親たちのグループとしての成長と、加えて、多くの若い韓日国際結婚家族がソウルの中心から1時間弱離れたイルサン近隣に住んでいるので一定程度のこうした家族のニーズが常にあるという地理的条件などを挙げるができるだろう。

#### ⑤ タイでの日本人父親による日本語サークル：バンコク日本語サークル

バンコク日本語サークルは一人の自営業の父親が土曜日に、自分の仕事場を教室として開放し、無償で教える日本語サークルである。主宰する父親は、自分の子どもが小学生であるため、同様の立場にある国際結婚家庭の子どもで小学生の15 - 20人くらいを自らが教師となり教えていた。タイには日本人学校もあり、学校以外でも日本語教育をしているインターナショナルスクールの幼稚園や日本人会内のバイリンガル部会などもある。また、「タイ国日本語教育研究会」や「タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会」といった国際結婚家族の子どものバイリンガル教育を支えるための日本語教師たちを中心とした日本語教育研鑽の会も存在する。

バンコク日本語サークルの主宰者は、タイの日本企業の増加に比例してバンコクには日本人が多く在住しており、日本語ができることが経済的豊かさにもつながる、すなわち、日本語と将来の仕事とが直結していると指摘していた。したがって、バンコクでは日本語ができることが職業や社会的な地位と関連し、日本語ができるようになるための学習は優先順位も高くなるといえる。2018年7月にバンコク日本語サークルの6人の親（国際結婚日本人父親4人、国際結婚日本人母親1人、国際結婚タイ人父親1人）に質問紙調査を行った中でも、

「何語の組み合わせのバイリンガル、もしくはマルチリンガルを考えているか」という設問で、日本語・タイ語・英語の三言語を5人が答えていたがそのうちの3人は日本語・タイ語・英語の順であり、1人はタイ語・日本語・英語、1人はタイ語・英語・日本語、1人の親に限ってはタイ語・日本語の二言語のみを挙げていた。しかし、具体的な家での日本語使用についての質問項目の回答に、「父との会話のみ」「日常会話」「簡単な指示」「母親と日常会話」など、日本人の親とのごく日常的な会話を中心であった。そうであれば、土曜日の日本語サークルは、同年代の子どもたちと「日本語で」話し、主宰者が準備するインターネットの教材やワークシート、小学校で学習するコンテンツを日本語で聞いたり、発言したりする場として、家では実現できない日本語での教育となっていることがわかる。

#### ⑥ 韓国とタイでの親による日本語サークル事例から得られた示唆

韓国とタイのそれぞれ一つづつの事例ではあるが、日本人親による日本語サークルの調査から得られた示唆についてまとめてみたい。まず、この調査を通してわかったことは、在外国際結婚家族の中でも、韓国とタイの文脈として、日本語に対する位置づけが異なるということが挙げられるだろう。韓国では、進学や就職を見据えて日本語よりも英語に価値を置く傾向がある。むしろ、タイでも英語熱は高く、社会の中で地位が高いことは確かではある。しかし韓国と一つ異なることは、タイの特にバンコクにおいては、タイ人の英語能力が高いところで英語だけで競争をすることよりも、日本企業の就職に、英語よりも日本語の方が重要視されることの方が有利であるという考え方がある。それが、タイの日本人集住地にあって日本語の価値を高めることになるのだろう。在住する「社会」の中での日本語の位置づけは、在外国際結婚家族の子どもたちの日本語環境づくりに影響し、親が子どものための言語を選択するときにも影響を与えるだろう。また、親のそうした判断や期待が小学校就学を機に、「社会言語（現地の言語）」、「国際語」、「親自身の母語」に優先順位をつけることにもなる。

国際語は通常は英語である場合が多いが、タイのように現在日本企業が多く、就職先として好ましいと考えられている場合は日本語も国際語として考えられ、在外国際結婚家族の場合は、親たちの母語と国際語が一致する場合があるということになる。一方で、言語と学校を結びつけて考えるときには、すべての国際結婚家族が自由に子どもの学習言語を選べるわけではなく、ここでは親自身の経済力が関わり、親自身の学歴が子どもへの期待にもつながる。言語の地位、親の経済力と学歴が、在外国際結婚家族の親の言語選択の際の要因として挙げられる。

さらに、在外国際結婚家族のバイリンガルとなる子どもたちのための日本語環境づくりを考えるときには、就学前の一人ひとりの言語習得のプロセスと環境が重要であり（藤田ラウンド、2013）、そこにおいては親による日本語教室・日本語サークルが子どもの日本語習得に果たす役割が大きいと考えられる。具体的には、1）母親、父親と性別に関わらず、親が自分の子どもと時間を一緒に過ごす、2）親同士が日本語を話す機会にもなり、そうした親同士のチームワークのような、助け合っている模擬家族のような雰囲気の中で、子どもたち

は日ごろ聞くことのない大人の会話を日本語で聴き、3) 家でもなく、保育園・幼稚園・学校(教育機関)でもない、インフォーマルな場で日本語を学ぶ、家や学校以外の自分の居場所のような「場」で「言語(ことばと文化)」を学ぶ環境として機能するのではないだろうか。

子どもの成長と共に、言語教育や親の言語選択も柔軟に考える必要があるが、子どもたちのために親が運営する日本語サークルの小グループは家族的な機能を持ち、子どもにとっては兄弟姉妹のように日本語を使って一緒に育つ機会ともなる。言語の構造だけではなく、ホリスティックな(全体的に捉える)言語を学ぶアプローチとして、親の運営する日本語教室は就学前には日本語環境としても言語を使いながら日本的な文化や社会を学ぶ機会ともなる。日本語の学習と同時に日本社会への社会化のプロセスをも担っているのかもしれない。

最後に日本語サークルの機能とジェンダー化された言説について言及したい。天童(2016)は子どもを産み育てる営為の中でも、特に産む性としての女性性は育児の担い手としての母役割と結びつき、「ジェンダー化された言説は母親を縛るだけでなく、男性を育児の世界から遠ざけても来た(天童、2016、p.115)」と指摘する。韓国の母親たちの日本語サークルは一見、「専業主婦」と「母親」というこのジェンダー化された言説の中で女性たちが子どものために行っているように見える。しかし、ひまわりキッズの日本人母親の語りでは、日本語サークルで運営の手伝いをしているうちにそれが自信となり、サークルを卒業して、仕事に就くことにつながったと聞いた。運営のためのパソコン作業、SNSでの連絡網での周知、イベント準備などをこなすが、これは社会の中では有償の仕事である。子どものためにサークルに関わったものの、運営に関わったことで母親の仕事復帰のためのオリエンテーションやスキルアップともなったといえる。日本語サークルというネットワークの中では、女性性として「主体化された」母親アイデンティティだけではない、親自身のアイデンティティを見出すこともできるのかもしれない。在外国際結婚家族の日本人の親たちは「外国人」であり、居住地の社会の中では周縁化される場合もある。だからこそ、親が自らの言語を用いて、行動ができる機会としても日本語サークルは手が届くものであり、同時に親と子どもの両者が参加できる場となりうるのではないだろうか。

加えて、ジェンダー化された言説では、母親が子育てを主にすると考えられる傾向にあるが、Baker(2014)はこれまでの研究で母親と子どもとの言語によるやり取りは主に、母乳をやる、お風呂に入れる、着替えさせるなどの家庭内での生活のやり取りに限定されがちであるという。つまり、父親は母親ができない役割を自らの役割として、自分の母語を使い、子どもにとってのその言語の活性化につながるように、子どもが好むやり方でじっくり遊ぶ等、こうした積み重ねを過小評価してはいけないともいう。在外国際結婚家族では、学校教育ではできない親たちのことばを使い、日常生活を営み、お互いを気遣うことができるようになる、そうした言語の使い方を目指すのが、家族にとってのバイリンガル教育といえるのではないだろうか。

(藤田ラウンド)

## 4. 研究成果還元方法の模索

本研究では、研究成果を在外で子育てしている父親たちに直接還元することを念頭にいくつかの方法を試みた。背景には、従来インタビューをした方たちには成果の還元として論文などを渡したうえで概要を説明してきたものの、その他の方々への成果還元の広がりが十分ではなかったという反省がある。そこでより間口を広く、専門的な形式にならずに、実際に子育てをしている方々に「考える材料」を提供するために読み物としてのモデルストーリーと漫画形式の二つの方法を試行した。

### 4-1 モデルストーリー化

まずは、調査内容を抽象化した上で、モデルストーリーを構成し、それに解説を施した読み物を作成した（図1）。この方法はこれまでの研究成果の公開（渡辺ら2012）と共通性の高い方法であったため、比較的作成しやすいものであった。一般読者向けとして十分な表現力が担保できなかった点や、一人語りにする事で描写を控えたものの文章の量が多くなってしまったため、さらにアクセスが容易な方法として漫画化を試みた。

図2 韓国在住者のストーリーと解説の例

<p>子どもが生まれてからは、妻の母と同居しています<sup>①</sup>。お願いをして一緒に暮らしていたという状況です。韓国はお姑さんにはよくしてあげる文化なので、とても助かっています。あと、韓国は一族が集まって住んでいる場合が多いんですが、妻の姉夫婦もすぐ近くに住んでいます。日本ではあまり家族が集まるということがなかったのので、韓国に来てその喜びを知りましたね。家族は温かいものだ。</p>	<p>ただ、おたがいの親との問題は避けて通れない気がします。特に日本人の妻が韓国人の両親と同居する場合、とても大変な思いをしている話を聞きます。韓国のほうが嫁姑の関係はまづいですね<sup>②</sup>。急激な経済発展をとげたせいで、僕たちの世代と親世代の価値観が非常に違うのも原因です。価値観だけではなく、生活様式、言葉の話し方とか、全部違います。義理の母も非常に言葉は強いんですが、同世代の中ではまた柔らかいほうです。それでも怒られていると感じてしまつて<sup>④</sup>と</p>	<p>きがありますね。</p> <p>これから韓国人と結婚する人に伝えたいのは、下の世代が上の世代に何か言つてごうら許されないとこのを、理解してもらえたらと思</p> <p>います。基本的に僕は義理の母に意見はしません<sup>⑤</sup>。その分、間に立つ妻に取り持つてもらう。妻の役割は大きいです。逆に妻が夫の母といつてごうら許してしまい、頼りすぎているように感じる<sup>⑥</sup>こともありますが……。</p>			
<p>① 韓国では日本よりも両親から援助を受ける程度が大きいようです。同居だけでなく、近くに住んで通うという事もあるよう。ただ最近では、両親に子守してもらおう代わりにアルバイトを払うというケースもあるようです。</p>	<p>② 嫁姑問題は韓国の方がきつ、というのは共通した理解のようです。国際結婚の場合には「外国人だから」というあきらめからか案になるケースもあるようですが、「外国人でも嫁なのだか」というケースの方が多いようです。</p>	<p>③ ここでの子世代対象者は一九七〇年代生まれ、親世代は一九五〇年代生まれ。この世代は朝鮮戦争後に生まれ、軍事政権下で青年時代までを過ごし、高度成長、民主化の中で子育てをしてきたこととなります。一方、子供世代は軍事政権末期から民主化の初期に生まれ、経済成長と自由化の中で青年期を迎えたこととなります。</p>	<p>④ 韓国語の語気を「攻撃的」と感じる日本語者は多いようです。特に韓国語初学者にはこの傾向が強いのですが、韓国語を使って仕事をすればレベルとなくとも「理解はしても語気の違いをこのようにとらえてしまうこともあるようです。</p>	<p>⑤ 彼の韓国社会理解が見えてくるどころです。やや過剰に適応しているようにも思いますが、もともと好意を持っていた韓国社会、韓国的なものを好ましいものとして学んだ語学学校時代、妻との恋愛、義理の母との同居を通して培ってきた精神的なコミュニケーション方法として興味深いところですね。</p>	<p>⑥ ここでは、自分の考える「韓国における親子の在り方」と妻の行動が異なることへの違和感の表明と読むことができそうです。理念化された韓国理解の影響の強さがうかがえるところでしょう。</p>

## 4-2 漫画化

近年は教育や広報目的の漫画が多数作成されており、表現や情報伝達的手段として漫画は確立されてきたといえよう。しかし、一方では、研究成果の公表に当たって漫画を活用する事例はさほど多くなく、参考となる情報も大変限られていた。さらに、いまだに漫画に対して否定的な見方を持つ者も少なくないため、研究成果の還元という趣旨を明示した上で、各所での情報収集、意見集約、調整を行った。

検討の結果、まずモデルストーリーとなる4コマ漫画を置き、その漫画で取り上げられた子育て上で重要と思われるポイントについての解説記事を入れるという形とした。また作画の作家選定にあたっては、学生団体、複数の漫画作成エージェント、プロの個人に打診し、様々な観点から検討したが、最終的には、本研究のテーマ自体にも共感を得られ、作画にあたっても繊細な表現ができることを期待して、日本フィリピンの国際結婚家庭をテーマにした作品を持つ前田ムサシ氏<sup>6)</sup>に依頼することとした。

漫画化にあたっては、研究代表の渡辺が作成したモデルストーリーを前田氏に送付、前田氏がネームを作成、共同研究者全員で内容を確認、必要に応じて修正を前田氏に依頼したうえで完成とした。結果として、中国、韓国、タイ、フィリピンそれぞれ9話（冒頭の1話は紹介もあるため6コマと扉の構成）の合計36話となった。さらに多言語展開をするため、日本語の他、配偶者側の言語（中・韓・タイ・タガログ）に加えて英語版を作成中である。これらの作品は、印刷物、Websiteなど多媒体を利用して、広く国内外に発信し、現実に海外で子育てしている父親やその配偶者たちに「役立つ」ように還元していきたい。

---

6) 国際結婚ファミリーコミックエッセイ作家。フィリピンの代表的な邦人誌『フィリピンプライマー』で「うちのフィリピンママ」を連載中。代表作は『フィリピン妻4コマ日記』PHP出版、2012年。『フィリピンかあちゃん奮闘記 in ジャパン』ぶんか社、2013年など  
同氏のブログはこちら <http://maedamusashi.com/>

図3 漫画の例 (韓国在住の日韓子育て家庭の話)



#### 図4 解説記事の例

##### 「子育てサークル」

家庭でなく、学校でもない「場」で子どもが日本語を使えるところとなると、この韓国在住日本人母親が運営する子育てサークルとしての日本語教室は子どもにとっても、母親にとっても最善の方法かもしれない。

言語的なメリットとしては、自分の母親が先生になる場合もあるが、他の母親が先生となったときにいつも聞いている母親の日本語ではない、日本語の使い方を学べる。また、母親だと感情的になる場合もあるが「教室」の場合は冷静に「先生」の役割の母親が教えてくれることになる。また、先生になる親が授業の準備をする中でどのような教材やどのような日本語が必要なのかを考えることにもつながる。

また、子育てのメリットとしては、子どもの同年代の友達ができることや、母親同士のネットワークもできる。特に子育ての悩みを分かち合い、「母語」の日本語で話し合えるという母親にとってのメリットは高いだろう。

参考になる本：

イーディス・ハーディング=エッシュ、フィリップ・ライリー著、山本雅代訳（2006）『バイリンガル・ファミリー：子どもをバイリンガルに育てようとする親のための手引き』明石書店

#### おわりに

本稿では、科学研究費基盤（C）『越境する結婚移住者の教育観に関する基礎調査：国際結婚した在外日本人父親の言説分析』2016-2018年度（研究課題番号：16K04630）の助成を受けて実施した調査の概要を取りまとめ、論点を示した。また、現在進行中の新たな研究成果還元方法についても方向性を示した。いずれも前回の研究（『多文化家庭の子育て戦略の課題 - 日韓中の国際カップルへのインタビュー調査』2013-2015年度）を拡張深化させたものとして、一定の評価のできるものとなったと考える。今後、助成期間中に得られた情報を精査して、論文等の形で発表するだけでなく、研究成果を反映させた漫画及び解説の頒布を通して在外の国際結婚子育て家庭に還元し、さらには、こうした国際結婚家族を取り巻く環境についての社会における理解を深めるためのきっかけ作りに努めたい。

謝辞：本研究は、本研究は JSPS 科研費基盤研究（C）16K04630 の助成を受けたものです。

#### 本研究に関する発表・論文

2016年度

- 渡辺幸倫 「国際結婚した日本人父親の子育て言説の考察 ―海を渡った父親たち―」国際理解教育学会 26 回研究大会（上越教育大学）2016 年 6 月 18 日

- 渡辺幸倫（2016）「家族の変化を知る —— 多文化な家族と地域社会」小泉康一・川村千鶴子編著『多文化「共創」社会入門』慶應義塾大学出版会

#### 2017 年度

- 渡辺幸倫・久保康彦（2018）「タイ王国における日タイ国際結婚家庭の教育観：教育商品調達についての語りから」『相模女子大学紀要』81,1-18.

#### 2018 年度

- 渡辺幸倫「バンコクで子育てする日本人父親の教育観 —海を渡った父親たち—」国際理解教育学会 28 回研究大会（宮城教育大学）2018 年 6 月 16 日
- 渡辺幸倫「フィリピンで子育てする日本人親の教育観」越境する結婚移住者の教育観に関する基礎調査報告会（北海道大学旭川校）2018 年 7 月 31 日
- 宣元錫「フィリピン居住国際結婚家庭の教育戦略」越境する結婚移住者の教育観に関する基礎調査報告会（北海道大学旭川校）2018 年 7 月 31 日
- 藤田ラウンド幸世「国際結婚家族のバイリンガル子育てとしての在外日本語教室—韓国とタイでの事例報告—」越境する結婚移住者の教育観に関する基礎調査報告会（北海道大学旭川校）2018 年 7 月 31 日
- 渡辺幸倫（2019）「バンコクにおける日タイ国際結婚家庭の教育商品調達について」『買い物弱者とネット通販 —在外子育て家庭からの示唆』くんぷる

#### 参考文献

- Baker, C. (2014) *A Parents' and Teachers' Guide to Bilingualism, Fourth Edition*, Multilingual Matters.
- Fujita-Round, S. (2019 in press) 'Bilingualism and bilingual education in Japan' in P. Heinrich & Y. Ohara (eds.). *Routledge Handbook of Japanese Sociolinguistics*. Routledge.
- Maher, J. C. (2017) *Multilingualism*. Oxford University Press.
- 厚生労働省（1996-2018）「保管統計表（報告書非掲載表）」「人口動態統計」『人口動態調査』総務省統計局
- 石井クンツ昌子（2013）『「育メン」現象の社会学』ミネルヴァ書房
- 多賀太（2010）「『父親の家庭教育』言説と階層・ジェンダー構造の変化」『教育科学セミナー』41 号、pp.1-15.
- 高橋均（2004）「戦略としてのヴォイスとその可能性 —父親の育児参加をめぐる—」天童睦子編『育児戦略の社会学』世界思想社、pp.176-200.
- 高橋均（2016）「2000 年代型育児雑誌にみる父親の『主体化』」天童睦子編『育児言説の社会学』世界思想社、pp.78-113.
- 武田里子（2011）『ムラの国際結婚再考 ——結婚移住女性と農村の社会変容』めこん
- 竹下修子（2001）「国際結婚カップルの異文化適応と結婚満足度：台湾に居住する夫台湾人・妻日本人の場合」『金城学院大学論集 社会科学編』、vol44, pp.127-137.

- 天童睦子 (2016) 「新自由主義下の再生産戦略とジェンダー—「子ども・子育て」という争点」  
天童睦子編『育児戦略の社会学』世界思想社、pp. 114-133
- ニ ヌンガー・スアルティニ (2014) 「国際結婚における変化とライフスタイル移民の出現  
インドネシア・バリ島に移住する日本人女性の事例から」『文化 = Culture』、vol. 77(3・  
4), pp. 226-212.
- 花井理香 (2012) 「韓日国際結婚家庭の日本語継承要因—在韓日本人母を中心として—」『多  
言語多文化研究』18号、全国語学教育学会バイリンガリズム研究会、pp.39-55.
- 藤田ラウンド幸世 (2013) 「国際結婚家族で母語を身につけるバイリンガル」加賀美常美代  
編著『多文化共生論』明石書店、pp.149-173.
- 松谷実のり (2014) 「現地採用移住の社会学的研究序説: グローバル化時代の多様な移住経験」  
『京都社会学年報』、vol. 22, pp. 49-69.
- 渡辺幸倫編著 (2012) 『新宿のニューカマー—韓国人のライフヒストリー記録集の作成—顔  
の見える地域づくりのための基礎作業 最終報告書』トヨタ研究財団 2009 年度助成研  
究 (D09-R-0422)
- 渡辺幸倫 (2014) 「日本の多文化家庭の子育て課題—中国人、韓国人を妻とした日本人夫  
の語りから」川村千鶴子編『多文化社会の教育課題—学びの多様性と学習権の保障』、明  
石書店、pp.258-279.
- 渡辺幸倫、藤田ラウンド幸世、宣元錫 (2016) 「国際結婚家庭の子育て戦略: 韓国在住韓  
日カップルの日本人「父親」と「母親」の語りから」『相模女子大学紀要』、vol.79, pp.  
9-24,
- 渡辺幸倫、藤田ラウンド幸世、宣元錫、李埈鉉、裘曉蘭 (2016) 「多文化家庭の子育て戦略  
の課題: 日韓中の国際カップルへのインタビュー調査」『相模女子大学文化研究』、vol.  
34, pp. 1-26.
- 渡辺幸倫、久保康彦 (2018) 「タイ王国における日タイ国際結婚家庭の教育観: 教育商品調  
達についての語りから」『相模女子大学紀要』、vol.81, [http://libopac.sagami-wu.ac.jp/  
webopac/TC10133268](http://libopac.sagami-wu.ac.jp/webopac/TC10133268)